記念館会報　Vol. 14　　2015. 12. 21

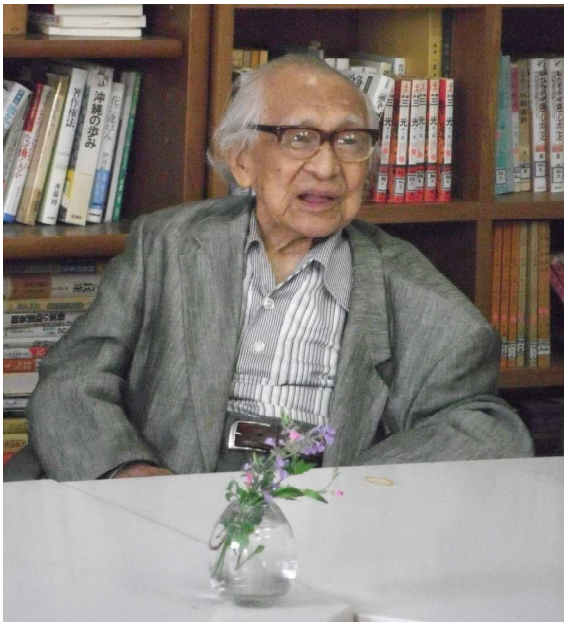
NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

むのたけじさん「名誉顧問」に就任

むのたけじさんは敗戦の 1945 年 8 月 15 日、「記者として責任をとる」と朝日新聞社を一人退社しました。その後、故郷の秋田県横手市に戻り週刊新聞『たいまつ』30 年間発行し、現在、地元の図書館で「デジタル化」を進めています。来年 1 月 2 日に満 101 歳を迎えるむのさんは、今もお元気で現職ジャーナリストとしてご活躍されています。昨年は日本ジャーナリスト会議（ＪＣＪ）から「特別賞」を受賞し、今年は受け取っていなかった東京外語大の卒業証書も受け取り話題になりました。

記念館では過日講演をお願いしましたが、生憎直前にむのさんが「帯状疱疹」に罹り実現出来ませんでした。その後「もうご高齢でご無理はお願い出来ない」と諦めていた処、ご子息の医師で医学博士の武野大策さんから「父が記念館を訪ねたいと言っているのですが、お訪ねしてもいいでしょか」とご連絡戴きました。むのさんは講演が「キャンセル」になった事を気に掛けて下さっていたのです。記念館では「もちろん喜んで」とお迎えしましたが、急だったためその時は理事と日頃ボランティアでご協力下さっている皆様と「交流会」と言う形でお話しを伺いました。お話しの最後に『此処が中日問題を考える埼玉の中心になって欲しい」と話して下さり、大策さんと共に親子で会員登録までして下さいました。

今年改めて会場が狭く僅か 30 名ほどの講演（会報 13 号）をお願いしたところ快諾戴き当日



むのたけじさん（2015. 6. 1　記念館で）

目　　次

・むのたけじさん「名誉顧問」就任 …… 1
・北京「シンポジウム」報告
　松村高夫 理事長 …… 2
　兒嶋俊郎 理事 …… 4
・13 回「中帰連に学ぶ会」
　細川清和さん …… 5
・「再生の大地」合唱団訪中報告
　姫田光義 館長 …… 6
・「硲・海部 ご夫妻」来館 …… 8
・「戦争遺跡保存全国シンポ」参加 …… 8
・「平和のための博物館ネット」交流会 …… 9
・「人民中国」掲載 …… 9
・「山梨平和ミュージアム」来館 …… 10
・「日中友好協会」来館 …… 10
・「振込用紙」同封にていて …… 10

は 100 歳とは思えないお元気で現状の政治や社会に対し机を叩いて怒っていらっしゃいました。

講演の最後には『死んでも会費を払うから運動を続けて欲しい』とまで評価下さり感謝の思いでいっぱいです。その時の僅かばかりの謝礼も数日後全額「カンパ」という形で逆に振り込んで下さいました。

この 12 月に改めてむのさんに「名誉顧問」の就任をご相談したところ快諾下さり「来年も何かお手伝いができるかも」とまで言って下さり感謝です。これからもご指導と叱咤激励を賜りたいと思います。何時までもお元気でご活躍お願い致します。

北京における『戦争の痛みを忘れず、心の中に永遠の平和を—中日関係シンポジウム』（2015年9月21日、22日）参加報告記

松村髙夫・理事長

このシンポジウムは２日間、北京京倫飯店において中国友誼促進会の主催で開かれた。中帰連平和記念館は日中協会と共に後援団体であった。オープニングは、劉京中国友誼促進会理事長の挨拶、近藤昭一衆議院議員の挨拶につづいて、私･松村が中帰連平和記念館代表理事として挨拶し、池田大作創価学会名誉会長の挨拶（代読）で終わった。日本からの参加者は21名。うち中帰連平和記念館の関係者は、私の他に石田隆至、張宏波、児嶋俊郎、荻野富士夫の諸氏であった。中国の参加者は28名。2日間に報告されたテーマは、大別すると3つになろう。即ち、(1)安倍首相の戦後70年談話、安保関連法案の強行採決などの日本の右傾化する政治状況、その右傾化傾向が日中関係に及ぼす影響、さらに日中の民間友好団体の交流を通じた関係改善の展望について報告された。(2)日本の朝鮮、中国などの植民地支配のなかで起こった歴史事実に関する諸問題、即ち慰安婦問題、731 部隊の人体実験、細菌戦による被害、 関東大震災時の中国人虐殺、重慶爆撃、花岡事件などが、日本における補償裁判と関連づけて報告された。(3)中帰連について、中国の撫順戦犯管理所での寛大政策の実行、および、日本における中帰連の活動について報告があり、さらに中帰連会員の家族の視点から伊東秀子氏（父は元中帰連会員・上坪鉄一氏）と小島一博氏（父は元中帰連会員・小島隆男氏）が報告した。

オープニングでの松村の挨拶には次のような一節が含まれていた。

「・・・・・日本では1945年以前は学者、医者、科学者、文学者、美術家、音楽家、ほとんど全員が軍部の前に総崩れになりました。さらに悪いことに、戦後自己批判することなしに､戦前の地位に復帰していきました。つまり誰も戦争責任をとらなかったのです。このことが戦後日本の民主主義が根を張らない不安定なものであった根本的原因の一つだと考えています。そうした状況のなかで、時間的には数年遅れますが、戦争責任をとったグループがありました。それは中国帰還者連絡会（中帰連）です。・・・・・」

中帰連に関する報告はシンポジウムのなかでも最もまとまった系をなしていた。中国側では歩平「中帰連と戦後日本の戦争責任に対する認識」は基本的問題点を提示し、高海寛「人道主義で平和の良知を喚起する一日本戦犯に対する改造と教育」、李占恒「拘禁中の日本戦犯に対する新中国の人道主義管理」、侯桂花・撫順戦犯管理所元所長「平和を大切にし、二度と戦争を起こさないことが中帰連の心からの願望」、周桂香「中帰連と撫順市との経済交流の意義及び課題」の諸報告は、それぞれの視角から撫順戦犯管理所における戦犯史上稀に見る人道的戦犯政策とその成果を照射した。日本側では、石田隆至「日本人戦犯の教育改造における『感情』」、張宏波「戦後中国の対日友好外交における日本戦犯教育」は、日本国内の中帰連会員を多数聞き取りした蓄積に基づいて、「撫順の奇跡」に新しい光を当てた。山陰中帰連を受け継ぐ「あさがおの会」から西村弘命氏が、広島･岡山の中帰連連絡会から由木栄司氏が、それぞれの地域の中帰連とその関連組織の活動の実状と問題点を報告した。

伊東秀子氏(弁護士、元衆議院議員)の報告を短縮して記すと次のようなことだった。伊東氏は2010年6月初めて撫順の戦犯管理所跡を訪ね、「上坪鉄一は731部隊に中国人22名を送った」との父の供述書を見て強い衝撃を受けた。秀子さんは1943年8月新京の関東軍司令部陸軍官舎で生まれたが、同年7月末父・上坪鉄一は満州の関東憲兵隊司令部に配属になり、鶏寧憲兵隊の隊長を務めた。上坪は1945年8月24日、侵攻してきたソ連軍を通化駅に迎えにいって消息を絶った。1958年、中学3年のとき父が撫順戦犯管理所を出て帰国した。母と二人だけの生活に慣れていた秀子さんは、ちょうど思春期だったこともあって、規律正しい生活に慣れていた父に対してなかなか心を開かず、夫婦･親子の関係はなかなか円滑には行かなかった。父は「戦争は絶対よくない」「中国に対してやったことを思えば、死刑になっても当然だった。本当に中国に対しては足を向けて寝られない」と事あるごとに語っていた。父の言葉には本気が漲っていて真に迫る迫力があった。そのためその父の言葉が私たち家族の魂に深く浸みこみ、それが人生の支柱になった。いまでも中国への感謝の気持ちに繋がっている。父は「戦争は人間を獣と狂気にする」と語り、「平時は真面目で穏やかな人間が、戦地に行くとどんな酷いことでも平気でする人間に代わる。他人の家の物資を奪い、平然と人を射殺し、女を見れば強姦する。本当に戦争だけはやってはいけない」と語っていた。父は人生の最後に「兄妹仲良く過ごしなさい。絶対に戦争を起こさないように、日中友好のために力をつくしなさい」という遺言を残して、83歳で他界した。

この伊東秀子氏の報告を誰が涙なしに聞けただろうか。参加者は戦争中の歴史の過酷な事実に対峙させられ、これから何をすべきかを深く考えさせられた。同時に戦後の反戦平和、日中友好運動に果たした中帰連の大きく貴重な役割を再認識させられた。

中帰連平和記念館関係者の個別報告では、松村の「中国における731･細菌戦部隊による被害と日本における裁判闘争」に続いて、一瀬敬一郎氏が細菌戦裁判を主導した弁護士の立場から「731部隊細菌戦問題の解決を目指す市民運動と当面の運動課題について」を報告した。児嶋俊郎氏は「満鉄平行線に見る日本当局者の対中認識」を、荻野富士夫氏は「日中戦争前夜と現在ー『戦後70年』をめぐって」を報告した。また、「関東大震災で虐殺された在日中国人労働者と王希天義士」について報告した林伯耀氏（在日華僑中日交流促進会共同代表）は、報告後私にこのテーマの研究では仁木ふみ子先生に多くの教えを受けたと述べ、仁木先生の死を悼んでおられた。

松村髙夫・理事長（左から3人目）伊東秀子・弁護士（左）

北京でのシンポジウムについてのコメント

兒嶋俊郎･理事

今回北京でのシンポジウムに参加することができ、貴重な経験を積むことができた。中日友誼促進会をはじめとする関係の方々に深く感謝したい。その上で個人的に強く印象に残ったことを書いておきたい。

まずなによりも厳しい日中関係の時こそ、直接このような話し合いの場を持つことが重要だということである。その上で以下の２点を確認したい。

一つは日本の政治状況の右傾化を厳しく中国側が指摘したことである。中国社会科学院日本研究所所長の李薇氏は日本社会では、戦争責任を追及されることから解放されたいという意識が強まっており、責任を明確にし、何を誤ったかを自覚しなければならないという姿勢がない。日本国民自身、国が起こした戦争であり、自分たち一人一人には責任がないと感じている。このような認識を基礎に新たな安保法制が通過した。このように指摘して日本の状況に危機意識を示された。また氏は日本という国は理性的にものごとを考える国ではないとも指摘された。このような指摘には私も全く同感である。

日本の現況に対する懸念は日本側の報告にもある。明治学院大学の準教授の鄭栄桓氏は、70 年談話がアジア太平洋戦争を侵略と認めず、植民地朝鮮の問題をほとんどネグレクトしたことを指摘している。また戦時までの戦争責任は認めても、戦後は民主的で戦争を反省してきたという認識が日本社会に広く共有さ　れているが、その点も実はかなり問題があると指摘した。

明治学院大学准教授の張宏波氏は日中関係の難しさについて、安保法制に反対する人達の中にも、中国は好戦的だという認識を持つ人達がいることを挙げている。

また日中協会理事で元外交官の白西紳一郎氏は日中間で経済成長期に軍拡が進行してきたと述べた上で、相互に国民を刺激して事態が悪化していると指摘した。なお白西氏は尖閣問題が日中間で棚上げされていた問題であることを確認の上、民主党政権期の対立先鋭化は、前原誠司大臣と外務省内の一部の強硬派による先導が原因であり、今日の安保法制を導くためのものだったという見解を示された。

このような日本の右傾化を懸念する声とともに、別の側面にも着目した報告や意見も見られた。外交学院教授の周永生氏は、安保法制を取り上げ、武力行使の 3 要件のもとで今までとは異なる軍事行動がとれるようになったと述べ、日本が南沙群島や台湾問題に関与できる体制を整えたと指摘した。しかしこの法制審議の過程で日本の世論に反対が高まり、安倍内閣不支持が上昇してきたことも指摘し、それまで日本国内の右傾化のみに注目してきたが、そうではない姿にも注目する必要があると感じていると話された。

また北京大学の徐勇教授は、1990 年代後半に日本の平和団対を調査した経験に基づ

兒嶋俊郎･理事（長岡大学）

石田隆至･理事（明治学院大学）

き、日本には平和団体が数百ありその活動が活発であること、歴史の真相を明らかにする上で役割を果たしてきたことを指摘した。実際、中国の歴史資料を発見する上で学者ではない一般の市民が貢献したことを紹介し、重慶爆撃、あるいは細菌戦の問題について、日本の市民との交流を通じて日本国内の良識ある人々との関係が重要だとの認識に到ったと話された。

以上の他にも、在日華僑中日交流促進会共同代表の林伯耀氏による関東大震災の際の虐殺の問題についての報告にも感銘を受けた。震災当時、五四運動の時期だったにもかかわらず中国政府も民間も多くの支援を行ったこと、しかし日本での虐殺が報じられると抗議活動に代わったことが報告された。林氏によれば､虐殺までは中国人は日本人に対して｢隣国の隣人｣という気持ちを持っていたという。

周桂香氏(大連理工大学副教授)の撫順市との経済交流の報告、張国通氏(『花岡事件 60 年』著者)の花岡裁判に関する報告等多くから学ぶことができた。このような議論の内容が広く日本国内に周知されることを希望している。

(松村報告で紹介されているものは言及を避けた。そのため伊東秀子、小島一博氏らの報告にふれていない)

13回「中帰連に学ぶ会」開催

『今日の中国～定年後の10年間に見聞きした・・・事』
講師 細川清和さん

むのたけじさんと懇意で記念館の会員にも登録下さっている建築家の細川清和さんを講師にお迎えし、11 月 1 日に「学ぶ会」を開催しました。細川さんは大林組で電通本社ビルなどの設計を担当し、退職後は日中を往き来し中国での建築設計や若手建築家の指導や育成などに尽力されています。

当日は『今日の中国～定年後の 10 年間に見聞きした・・・事』と題して 700 枚以上の写真をパワーポイントに編集した講演をお願いしました。中国のビル建設の現状や中国の大学での文化交流など幅広いお話をして下さいました。旧満州国時代に日本が建設した建物は非常に質が良く今も政府機関や病院などに利用されている現状写真や、北京オリンピック見学の話なども紹介されました。

中国の現状を理解するためには、先ず中国の歴史を理解する必要があると、秦時代から欧米列強による植民地の時代まで、さらにアヘン戦争、日清、日露戦争、日中戦争、朝鮮戦争、毛沢東の大躍進や文革から鄧小平による改革開放まで可成り詳しく解説下さいました。

中国の現状については人口の都市移動、急激な都市建設、満州国時代の建築、上海の租界時代と現状の比較、北京、天津、広州、深圳、香港、大連など各地の主要都市の発展状況が紹介され、短期間に建設された高速鉄道網、地下鉄路線、高速自動車道路網の現状、新幹線事故や道路、鉄橋の崩落事故、交通渋滞状況の説明がありました。

中国での建築品質問題に関しては、文化大革命により中国での高等教育が 15 年間停止し、インテリの下放で、社会から優秀な技術者や経験豊富なベテランが消えてしまった後遺症がいまだに尾を引いていること、さらに汚職体質や営利最優先主義による弊害の説明もありました。

中国の富裕層や庶民の生活風景紹介があり、政治関連では江沢民、胡錦濤政権の時代的役割から習近平体制が確立されるまでの解説、習近平の履歴や汚職撲滅、習近平のアキ

（姫田館長、松村理事長、細川さん、武野さん）

レス腱である民主化問題、民族問題、インターネット監視や言論統制の話があり、中国の格差問題、環境問題、水不足など今後の課題の説明もあり、経済関連では一帯一路政策やアフリカ進出、外交問題では中印国境紛争、南沙諸島問題などの話がありました。

教育・文化関連では中国から米国への留学生は年間 40 万人（2012 年）で日本人留学生の 10 倍であり、アメリカに於ける知中家が急速に増え知日家を圧倒していること、中国人の日本留学は増えているが日本人の中国留学は増えていないこと、世界各地に「孔子学院」が在るが、アメリカでは文化施設では無く国家の出先機関として警戒されていること、中国国内では 24 時間外国語ＴＶ放送が複数あり、英語放送では英語で討論できる中国人専門家が実に多い話などもありました。

日中の課題としては、尖閣問題などは棚上げし歴史認識は政治問題にすべきではなく事実の検証が大事であり、民間交流が増えれば相互理解が深まるとの結論でした。

当日はむのたけじさんのご子息である武野大策さん（医師・医学博士）も同席下さいました。

日中間に広がる奇蹟の花・撫順の朝顔
—「再生の大地」合唱団報告

姫田光義・館長

（はじめに）「平和と日中友好を歌うために、平均 70　歳代の日本の老人たちが私費で、はるばるとやってきた」と中国で紹介されて私は本会の理事ですが、「再生の大地；撫順戦犯管理所」合唱団の団長でもありますので、先ずは合唱団の北京公演に際しての本会の支援、ならびに２月７日に開催される同合唱団の「帰国報告演奏会」の共催団体になってくださったことに謝意を表したいと思います。また『中帰連』最新号の巻頭論文で詳細に紹介されているように、本会の松村理事長が「戦後七十年　新しい日中関係の未来を開くつどい」で講演された際に、私たちの合唱団をご紹介くださったことにも謝意を表します。「再生の大地」合唱団が歌っているのは、本会の存在理由と同じく中帰連の成り立ちと帰国後の終生変わらぬ「反戦平和と日中友好」のための活動への畏敬の念をこめた人間讃歌であります。現今の日中関係悪化の状況、とりわけ「安倍談話」に見られる侵略と加害の歴史を後世に伝えることを拒否するような時世の下では、本会も合唱団も、またこの曲の基になっている「撫順の奇蹟」を受け継ぐ会も、小さな組織であるとはいえ、極めて重要な存在意味をもっていると言えるでしょう。三者が共通の願いと目的をもって協同することは今後ますます大切になってくることを信じて、その一環としての合唱団の北京公演の報告をさせていただく次第です。

（１）好評だった公演ーたくさんの中国の人々に聴いていただいた

夢にまで見ていた北京公演が実現したうえに、思いもかけないほど沢山の中国の人々に聴いていただけた。中国国際放送局（ＣＲＩ）のご尽力のお蔭であるが、同時に公演の時期が「70 周年（中国では“抗日戦争勝利・世界反ファシスト戦争勝利 70 周年”）」記念行事の前でもあり、また 8 月 14 日には国際的に注目を集めていた安倍総理の「戦後 70　周年談話」が発表されたこともあったから、日本・日本人の言動が注視されていたこともあったと思あれる。

（２）公演に至るまで—たくさんの中国の方々にお世話になった

以下に北京公演の旅をざっと報告したいが、詳細は既に『中帰連』最新号に書いたのでご参照いただきたい。先ず北京の国際放送局のホールで歌う前に多くの中国の方々にお世話とご支援をいただいたことに触れる。8 月 28　日夜、瀋陽に着いて出国したところで驚いたことに撫順市の外事弁公室の方々が趙詩蔓さん共々、わざわざ出迎えてくださった。一夜明けて瀋陽市内。一昨年、参観した時はまだ修築中だった戦犯裁判所を訪れた。内部には、当時の裁判の状況が復元されていて、戦犯たちと裁判官・中国人証言者たちの蝋人形が展示されている。そのホールで、数曲ア

カペラで歌った。何事ならんと集まった中国人観衆も、歌（「撫順の朝顔」）の最後の部分「過去を忘れず未来の教えとする（前事不忘　後事之師）」というところで意味が分かってくれたらしく、一緒に歌ってくださった人たちもいた。次いで「９・１８記念館」を訪れた。入り口にはこれも思いもかけず館長の范麗紅さんが出迎えてくださり、ご一緒に記念広場まで行って「撫順の朝顔」を歌った。裁判所と同じく、その最後の部分を歌ったところ、私たちを取り巻いていたまったく見も知らない参観者も一緒に歌ってくださったのには感動させられた。この記念館に、撫順からわざわざ「撫順戦犯管理所旧趾陳列館」館長の孫傑さんが会いに来てくださった。

瀋陽での見学を終えてバスで撫順に向かう。そこでは先ず「満州事変」の後日本軍によって三千人もの村民が虐殺されたといわれる平頂山の「平頂山事件記念館」を訪れ、その犠牲者慰霊碑に献花するとともに一曲献歌させていただいた。次いで戦犯管理所旧址を訪問、李副所長（私たちはこのように呼びならわしてきたが、現在は「旧址陳列館」だから副館長か）のご案内で館内を参観、戦犯たちが建設した野外舞台で歌い蒙古踊りをも披露した。私たち合唱団のテーマ舞台であるから、幾度来て歌っても感慨を新たにする。その足で趙詩蔓さんがセットしてくださった大自然小学校に向かい、そこのホールで地元の撫順市新文連合唱団と交流、お互いに数曲づつ披露しあった。アカペラで歌う私たちの歌の意味が分かってくださったかどうかは分からないが、わが団員の真剣さに熱烈な拍手を頂戴し、日中友好交流の責を果たすことが出来た。

31 日、いよいよ今回の本番である北京に向かう。早朝、撫順を出発、瀋陽にて新幹線に乗車。5 時間の列車の旅を経て北京に着く。この夜、中国人民対外交流協会の招待宴。会長の李小林さん（元国家主席・李先念さんのお嬢さんとか）のご挨拶と日中友好協会理事長の田中義教さんの答礼挨拶があって、私たちの合唱を数曲披露させていただいた。

（３）公演の日　大きな驚きと感動とをいただいた公演の日、9 月 1 日午前、中国国際友誼促進会のお招きで「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の平山、保里、荒川と私が参加、促進会副秘書長の陳少信さん、国際部副部長の愈雷さんら数人が迎えてくださった。その場で平山さんから中帰連の元事務局長・高橋哲郎さんからの熱いメッセージが伝えられた。合唱団のリハーサルの時間も迫っていたので、ゆっくりとお話合いすることもできなかったが、今後の緊密な連携と交流を約してお別れした。

さていよいよ、夢にまで見てきた北京の国際放送局の檜舞台での公演が始まった。その直前に記者会見があり、放送局の局長（ＮＨＫでいえば、さしずめ会長にあたるらしい）王庚年さん、前国務院新聞弁公室主任の趙啓正さん、前文化部副部長の劉徳有さんら著名な方々と会見、親しくご挨拶をいただいた。

会見が終わりリハーサル。友情出演団体の「放送の友」合唱団も登場して同じくリハーサル。何しろこの人たちはセミプロだ。合唱の技術は我が合唱団よりもはるかに上であることは団員みんながすぐ分かる。それが逆にみんなを発奮させたようだ。私たちは心意気

で歌うと。とりわけこの合唱曲は歴史事実をテーマに、憎しみ悲しみを超えて日中両国の人々の間に花開いた「赦しの花・撫順の朝顔」を歌うメッセージ性の濃い曲なのだ。中国の聴衆にこのメッセージを理解していただけるかどうかが勝負の分かれ目だと覚悟を決めて歌う。テロップやマイクなど放送局の周到な準備のお蔭で、中国人にも十分に分かってもらえたようで、盛大な拍手、スタンディングオベーションがあり、歌い終わって舞台の上に上がって挨拶くださった上記の幹部たちも絶賛の言葉を惜しまずお話し下さった。私たちの平和と日中友好にかける思いが直接伝わった！団員たちの上気した嬉し気な表情、友情出演の「放送の友」合唱団員たちとの温かい握手と抱擁の交換。ああ、来てよかった、中国の人々に聴いていただいて本当によかった。これがその時の偽らざる気持ちだった。

（終わりに）日中友好のための民間交流の大切さを感じた

私たち合唱団は中国が報じたように老人が多い。戦争の悲惨さと「人」が「鬼」に変わっていく道筋を承知している人々だ。それゆえにこそ、逆に「鬼」から「人」へ変わっていくことの難しさとその苦労を理解できるのだと思われる。みなさん極々自然に、そして素直に「撫順の奇蹟」を信じて、それをなんとか中国の人々に伝えたいという熱意をもっている。人と人との交流がそれを可能にするのだとも信じている。撫順の早朝、多くの団員が街中の広場に出かけ、言葉も通じないのに中国の人々と歌ったり踊ったりして交流していた。私はそこに、草の根の日中友好の基礎が芽生えるのだと感動させられた。また北京の舞台上でも「放送の友合唱団」の人々と抱きあって感動を共にしていた。この心情のこもった顔と顔を向き合わせた交流こそが友好を育てる基盤になると信じて、帰国した次第である。

【陶芸家　硲・海部ご夫妻来館】

「古九谷焼」陶芸家の硲紘一さんと、同じく陶芸家で奥様の海部公子さんが 9 月 20 日に来館されました。お二人は師匠の硲伊之助さんに師事を受け、硲さんは現在加賀市の『硲伊之助美術館』の館長をされています。9 月 13 日まで東京の富岡八幡で「作品点」を開催していましたが、むのたけじさんと wam の池田恵理子さんのご紹介で来館されました。

（硲・海部　ご夫妻）

【戦争遺跡保存全国シンポ　千葉館山集会】参加

毎年開催されている『戦争遺跡保存全国シンポジウム』が、今年は千葉県館山市の「千葉県南総文化ホール」で 9 月 4 ～ 6 日に開かれ 350 人余りが参加しました。

全体集会・基調講演の翌日は「保存の現状と課題、調査の方法と整備技術、平和博物館と次世代への継承」と、特別部会として「米占領軍の館山上陸と直接軍政/証言者のつど

い」の 4 つの分科会に別れ全部で 28 件の発表がありました。記念館は芹沢事務局長が第 3 分科会の『平和博物館と次世代への継承』に参加し「中帰連と記念館」の運動と近況を報告しましました。同分科会では 7 団体の発表があり、沖縄など遠方からの参加や現地のボランティアスタッフの活躍に感謝の思いでした。

尚、来年の「20 周年シンポ」は 8 月 20、21 日に、第 1 回シンポが開かれた長野県・松代市で開催することが決まりました。

『平和ための博物館 市民ネットワーク全国交流会』参加

東西で毎年交互に開催している『平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会』が、14 回の今年は 10 月 24，25 日の両日に名古屋の「ピースあいち」で開かれ両日とも 50 余名の参加者がありました。

初日は中帰連平和記念館、山梨平和ミュージアム、ナガサキピースミュージアム、岐阜空襲を記録する会、「ピース大阪」元学芸員、女たちの戦争と平和資料館（ｗａｍ）が発表し、翌日は丸木美術館、ひめゆり平和博物館、ピースあいち、立命館大学の両日で 10 人の発表がありました。

記念館からは松村理事長が 9 月 21，22 日に北京で開かれた『戦争の痛みを忘れず、心の中に永遠の平和―中日関係シンポジウム』（2 頁）の報告と、芹沢事務局長が記念館の近況を報告をしました。また「満蒙開拓平和記念館」が時間がなく「資料」のみ提供下さいました。

初日には下記二つの「特別報告」もありました。

①『戦跡保存・公開と平和資料館（仮称）建設決定までの経緯と現状』
伊藤泰正さん（豊川海軍工廠跡地保存を進める会・豊川高校地歴科教諭）

②『鷹来工廠と学生たち―名城大学農学部にのこる戦争遺跡―』
渋井康弘（名城大学経済学部教授）

2 日目の冒頭には「立命館大学国際平和ミュージアム」の安斎育郎名誉館長の『戦後 70 年にあたっての平和博物館のありかたを考えると』題した特別講演がありました。初日の発表後には「懇親会」で皆さんと交流を図りました。

来年の「交流会」は 10 月 29，30 日に白河市の『アウシュビッツ平和博物館』での開催が決まりました。

【「人民中国」9月号掲載】

日本語の月刊誌『人民中国』が 7 月 24 日に取材に来館し、同誌 7 月号の『戦勝 70 周年特集』に「『鬼』から『人』になった戦犯たち」と題し 2 頁に渡り、中帰連や管理所、記念館のことが紹介されました。記念館で提供した管理所時代の写真や中帰連の皆さんが、当時、管理所内で書いた直筆の「手記原本」などの解説や写真なども掲載されました。

（『人民中国』2015. 7月号）

「山梨平和ミュージアム」来館

平和博物館ネットの仲間でもある甲府の『山梨平和ミュージアム』の皆さん 19 人が、浅川理事長と春日館長の同行で 11 月 1 日「原爆の図」の丸木技術館を見学の午後に来館下さいました

当日は「中帰連に学ぶ会」を開いており対応が不十分で申し訳御座いませんでした。「山梨平和ミュージアム」は戦争の経緯や甲府空襲と、二階には地元の言論人で元総理の石橋湛山の生涯と活躍も展示されています。同館は毎年『石橋湛山平和賞』を募集し表彰しています。

（「山梨平和ミュージアム」甲府市）

「日中友好協会」役員の皆さん来館

「日中友好協会・埼玉西部支部」の杉山副支部長、平松事務局など理事の皆さん 5 人が 11 月 2 日に来館されました。平松さんは記念館に会員登録も下さっています。

当日は 10 時過ぎに来館され芹沢事務局長が「中帰連」に付いて、シベリア抑留から撫順戦犯管理所での生活や処遇、周恩来が 3 回も書き直させ一人の無期も死刑も認めなかった特別軍事法廷の判決、帰国後の生活や運動や現状などについて説明した後、25 年前のＮＨＫスペシャル『戦犯たちの告白』を視て戴きました。

既に、皆さんは平頂山や７３１や方正日本人公墓などは承知しておられますが、改めて中国の寛大政策に感心していらっしゃいました。

（「日中友好協会」埼玉西部支部の皆さん）

「振込用紙」同封について

会報に毎号「振込用紙」を同封させて戴き「会費納入済」の方には申し訳御座いません。前号会計報告の通り会員以外の多くの皆様からも「カンパ」が届きますので、ご理解戴ければ有り難く思います。「会費納入状況」不明な場合は、下記事務局にお問い合わせ戴ければ対応させて戴きます、また年１回春の「会報」送付時に会費納入状況を封筒に明記させて戴いております。ご了解戴ければ幸いです。

『NPO・中帰連平和記念館』

〒 350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6
TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＭＬ：npo-kinenkan@freeml.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
郵便振込口座名「NPO・中帰連平和記念館」
振込口座　：００１５０－６－３１５９１８
開館日：「水、土、日」（10:30 ～ 16:30）